

西 上 免 遺 跡

調査の経緯 西上免遺跡は愛知県尾西市開明字西上免に所在し、東海北陸自動車道路建設に伴う事前調査として平成2年度より継続的に調査を実施し、計約10,000㎡ほどの発掘調査を行ってきた。本年度は4月から7月まで2,788㎡を実施し、本年度をもって西上免遺跡の東海北陸自動車道路建設予定地内の調査は終了した。

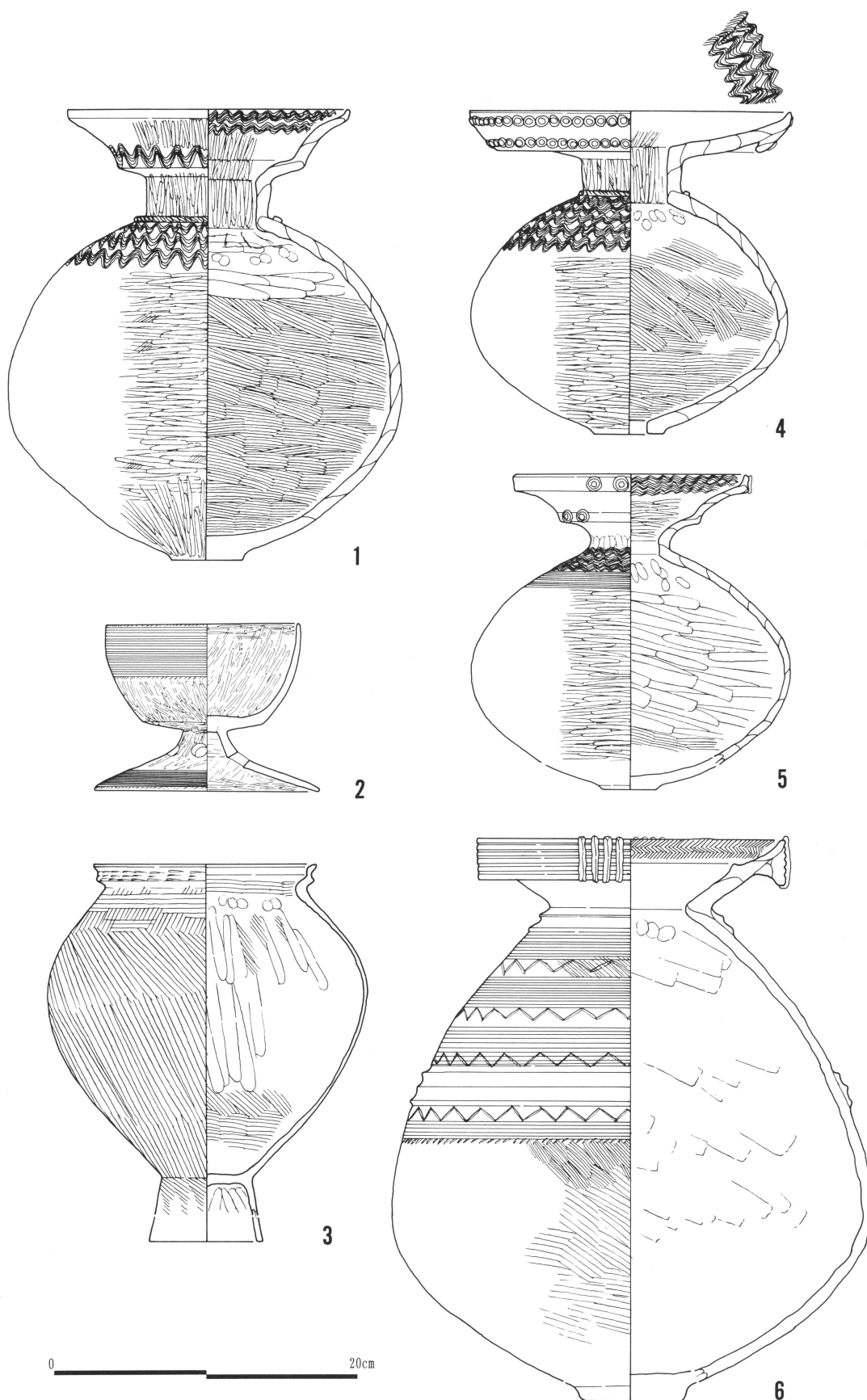
なお西上免遺跡は弥生時代中期・古墳時代および奈良時代、そして鎌倉時代から室町時代までの各遺構群の重複によって構成されており、現在の開明集落から延びる微高地西南端とその南側の低地部に展開する遺跡である。標高は6m前後を測る。

調査の概要 西上免遺跡は、古墳時代と鎌倉時代から室町時代にかけての2つの時期に主体があり、古墳時代は3世紀を中心とする遺構群によって構成され、道路予定地内では南部に位置する微高地南端部を中心に検出することができた。その内容は微高地端部に墳丘墓が展開し、その南である低地部には水田が存在する。住居については調査区内では確認できていないものの、地形・遺物の散布状況から開明集落西側である調査区東側に展開しているものと思われる。おもな遺構は墳丘墓4基・前方後方墳1基・土坑数基・溝3条・水田跡などである。また出土遺物として特筆すべき遺物は多孔銅鏃を含めた銅鏃2点、管玉2点・ガラス小玉1点、舟形木製品などが見つかった。

鎌倉から室町時代にかけての遺構は調査区全体にわたって検出でき、土壇墓多数・溝・井戸・建物といったものであり、微高地端部周辺では土壇墓と溝による区画が存在した。

本年度の調査 本年度の調査区は東海北陸自動車道路建設予定地内においては南部に位置し、昨年度の調査区である94A・B区の北側にあたる。最も注目すべき遺構は40mの前方後方墳の発見である。調査前の現状は水田耕作地であり、地表面での凹凸は全く認められない。水田耕土を除去すると直ちに検出面となり、昨年度の94B区で確認できた微高地端部が調査区南西端で僅かに認められた以外は、微高地上に位置する。この時点での検出作業の段階では調査区全体の範囲内に前方後方墳（SZ01）が存在していることを確認することができた。しかし前方部にあたる部分には現在の廃材投棄坑があり大きく攪乱され、前方部のほとんどが破壊されていた。また前方後方墳の南側には小規模な墳丘墓（SZ02）が1基存在し、周溝は昨年度の調査区に連続する。調査区西端では微高地の高まりが残存し、したがって本来は現状より約0.3～0.5mほどの高さが存在し、削平を受けていることが分かる。

さらに前方後方墳に重複するように中世期以降の遺構が良好に残存している。鎌倉時代としては土壇墓が数10基存在し、室町時代にかけては井戸・溝・土坑によって構成される区画が確認できる。



西上免遺跡 S Z01出土土器 (1 : 4)
(1・6 : 東くびれ部 4・5 : 北周溝 2・3 : S D25西側)



西上免遺跡 全景

前方後方墳 前方後方墳（S Z 01）の規模は、墳長約40m、前方部長は一辺約25m、後方部長15mで幅13mを測る。周囲には前方後方形の周溝が存在し、その幅は一定ではなく後方部北側で約9m、東周溝では7.5～10m、東屈曲部周辺では幅を拡張し、前方部では3～5mと後方部に比べて狭い。現状での周溝の深さは0.5～0.8mと浅く、墳丘は墳丘側ではほぼ垂直な立ち上がりが認められるのに比べ周溝外側では比較的緩斜面を呈する。なお溝底部は微妙な凹凸があり、一定ではない。周溝の堆積層は大きく3層よりなり、最下層は黄褐色シルトと黒色土の細かい斑土によるもので、墳丘側で厚く堆積する。おそらく墳丘盛土の崩落による堆積と思われる。土器はほとんど見られない。その上位には下層としての褐色土が0.2mほど堆積し、出土遺物の多くはこの下層低面で確認できた。さらにその上位である上層には数層のシルト層が堆積し、遺物はほとんど包含されていない。こうした層序の堆積の後に鎌倉時代の溝が掘削されている。おそらく平安時代末～鎌倉時代には前方後方形の周溝がわずかに窪みとして残存した景観が推測できる。

前方後方墳の周囲には興味深い施設が存在する。まず前方部周溝には重複するように溝S D 25が存在する。S D 25と前方後方墳との関係はおおむね同時期のものと思われ、S D 25の方向性に規制された形で前方後方墳が造営されており、前方部の周溝は主軸に対し斜行する。さらに前方部の先端の状況もやや斜行し、そこに造営上の制約が読みとれる。同様な点は前方後方墳東周溝の東側に沿って存在する溝S D 19との関係でも指摘できる。つまりS D 19によって前方後方墳の東周溝の幅が制約され、後方部北端では最も幅が狭く設計されている。こうした諸点からは前方後方墳を取り巻く造営空間には溝による区画が存在し、基本区画に制約される形で前方後方墳を含めた各墳丘墓が設営されているものと思われる。

前方後方墳の造営時期に関する問題は、周溝から出土した多くの土器によって類推できる。周溝内の遺物の出土位置には大きく3つのまとまりがあり、一つは後方部北周溝で墳丘側からの崩落状況で確認できたもの。次に東くびれ部で墳丘側からやはり崩落状況を呈するもの。最後に前方部南周溝に重複する溝S D 25西側で墳丘外から投棄・崩落された状況で発見できた資料群である。これらの土器には朱が塗布されたものや、焼成後の穿孔、煮沸痕跡等が明瞭に確認できるものが多い。なお所属時期は廻間Ⅱ式前半期を大きく下降させる資料は見あらず、おおむねこの段階にまとまりが見られる。したがって遅くとも廻間Ⅱ式初頭段階には前方後方墳が造営されていた可能性が高いものと思われる。

まとめ 今回の調査によって新たに40mの前方後方墳が発見され、その造営が3世紀中葉を下るものではないことが確認できた。さらにその周囲には小規模な墳丘墓が展開し、3世紀段階での墓域を形成している。またこうした墳丘墓が造営された微高地南には水田が営まれ、おおむね3世紀の集落遺跡の具体的な遺構配置を推定することができる。したがって西上免遺跡のあり方は濃尾平野における3世紀の典型的な集落景観を復原する上で貴重な資料を提供できるものとする。

（赤塚次郎）